

乳児期における 社会性の発達

(その二)

丹 羽 淑 子



児 童 発 達 講 座

⑤

乳児の情動発達を通じてみた社会関係の発達

(生後二か月より)

私どもは先に、乳児期の社会性発達の過程をたずね、一方においては、生来的に装備されたわずかなはたらきのほかは主として内部知覚のみに反応して生きている事実を明かにし、他方において、頼りない存在である新生児が徐々に外的刺激を受容することのできる

段階に生長して外界との交渉をもつに至ることに注目してきた。そして個体における知覚の発達に伴って、外界の刺激のうち、とくに人的刺激に対する反応はことごとく、情動を通じて出現することを見出した。それで、二か月以後の乳児の社会性発達の研究はもっぱら、情動生起の様相と、その変化を取り上げ、その刺激条件を分析することに重点がおかれる必要がある。このような目的のためには、前述のように、縦断的に直接観察を継続して一年間の全体的な行動発達の諸相の中から、社会的刺激に反応した行動を発見月日にしたがって整理し、そこに社会性発達の過程を見出す方法(多くの観察者がおこなった)と、集注的に一定の刺激を統計的に妥当な員数になるまで、各年令段階の乳児に与えて、その反応をみることによって一般的な発達の型を、より精密に検討する方法とを併用する必要がある。

そこで、新生児期にあらわれ始めた微笑現象を更に、実験的、横断的に追求して、一年間の微笑反応の発達パターンを検討し、あわ

せてその刺激を分析して、乳児の社会関係の変化をたどってみようとおもう。そうすることは必然的に、消極的情動、たとえば、不安情動にも関係することとなる。かくして、横断の実験観察の結果は、継続的におこなった縦の発達とあわせ検討されるであろう。今回は後者の場合を詳細に記述することを省いて、横断的研究に重点をおき、その結果を資料として考察することにしよう。以上の順序にしたがい、情動の発達を通じて乳児期の社会関係のパターンと、その意義を考察し、対象関係成立の成功および不成功がその後の精神発達や性格形成に及ぼす影響について、正常なハターンから逸脱する場合を参照しながら考えてみよう。

四、微笑反応と社会関係

(一) 乳児期の微笑現象に関する実証的研究

乳児の微笑が心理的現象として発達心理学者のあいだにとりあげられ始めたのは四十年ばかり前からのことにすぎない。その多くは、⁽¹⁾児童心理学者の手によって、個々の乳児の発達が伝記的に叙述される過程において、微笑や笑いの⁽²⁾ピッグの時期やその表出状態が述べられたものか、または、精神発達を測定する過程に観察された資料に基づいて考察されたものである。微笑や高笑そのものを、系統的に別個に研究対象として取り上げたのは、ワッシュバーン

WASHBURN, R. W.、ゴエラー夫人 BÜHLER, G.、デニス DE-
NZIS, W.、カイラ KALLA, E.、スピッツ SPITZ, R. A. の五氏で、
一九三〇年前後から始められたものである。

私はまず、これらの研究者が微笑に関する研究をおこなった足跡をたどってみることにしよう。

⁽³⁾ワッシュバーンはスフーンを落したり、膝を急にまげたり、玩具を差出したりしない、バーなどのいろいろな場面をつくり、子どもの笑いや微笑の実験をおこなっている。彼女の実験結果は、(1)無生物だけでは微笑がおこらないこと、(2)成人の微笑した顔に反応した、(3)微笑のおこる時期は一二週から四〇週で、その後は社会的刺激が、社会的微笑をおこすのに不確実な時期で、四〇週をすぎると、社会的刺激が必ず社会的微笑をおこすと結論している。

また彼女は母親の年令と、子どものわらいの程度との関係を考察し、年若い母親の方が年老いた母親よりも、子どもの微笑をおこす率が少ない(相関 \cdot 四一、 \cdot 四五)と述べている。彼女の実験結果の(1)(2)はビューラー女史その他、後になされた、より精密な実験結果とほぼ一致している。しかし彼女の実験には不備のあることを指摘しなければならぬ。それは第一に、観察をおこなった子どもの数がわずかに一五名に過ぎず、その観察回数も一五人中四人を八回、その半数が五回乃至それ以下である。このような小例をもつて結論することは冒険である。また実験も被験児を母親の膝の上に

抱いたままの状態でおこなっているの、厳密に刺激を統制したことにならない。

ビューラー女史は一九二七年に研究を発表しているが、これによると彼女は直接観察をおこなって微笑の現象と意義を考察し、子どもの微笑はその当初から、社会的現象であるとし、二か月末の乳児に微笑をおこさせる唯一のものは成人の顔であり、子どもは成人の笑顔に反映して(6)微笑すると述べている。なおまた、乳児期の一般的反応に対して、社会的な微笑や笑いなどのような割合でおこなうかを調査している。(表1参照)これによると、一般的予想を裏切って、初めに社会的笑いが発生し、次いで一般的な他の反応が分

表 1 社会的笑いの分量 ビューラー

月令	成人に 対し	他の 子に 対し	計	一般的 反応の 分量
1	—	—	—	—
2	100	—	100	11
3	89	—	89	8
4	92	—	92	25
5	60	15	75	50
6	50	—	50	38
7	49	13	62	50
8	20	30	50	30
9	10	40	50	25
10	40	30	70	50
11	25	50	75	30
12	10	40	50	25

化することが明らかにされている。社会的刺激もまずはじめに(三か月)成人に対し、ついで、他の子どもに、(生後五、六か月頃)おこなうと述べている。さて、ビューラー女史の微笑に関する解釈は直接観察を通じての巨視的な観点からな

れたものであるが、その後に、より分析的実験的に観察した結果とよく一致している。微笑をおこさせる刺激の問題については、なお再検討の余地がある。ビューラー女史は、それを人間の音声と視覚的にとらえた人間の笑顔であると述べているが、この点を独自の実験方法をもって明らかにしたデニス夫妻の報告にみてみよう。

(6) デニスは夫人と共に、生後三六日の二卵性双生児を四二八日まで自宅の実験室で養育し、最少限度に社会的刺激を統制して、精神発達の様相と微笑の発現状態を観察し、その期間中、三種類の実験を試みた。社会的刺激の統制とは、三六日から一二日まで、養護日課は授乳、沐浴、下着のとりかえのための接触に限定し、子どもに微笑したり、話しかけたり、また子どもと遊ぶといった社会的接触を除外した。つい立で二児の寝台を区切り、以上の目的以外の時は子どもをひとり仰臥させておく。室内では実験者デニス夫妻は自由に話し合うが、子どもにむかつては話しかけないこととした。以上の生活条件の下で、微笑に関する実験がおこなわれた。実験は一日一回、授乳直後に(1)胸部を軽く愛撫する(三〇秒)(2)あごの下をくすぐる(一〇秒)(3)わき腹をくすぐる(一〇秒)(4)寝台の上、上体を屈げて顔を近づけ、子どもにはほえみかける(三〇秒)その結果は四六回の微笑のうち三九回まで、寝台の上からほえみかける実験者に対して微笑をかえした。その他の刺激に対しての反応は不確実であったという。また人間の音声に対しては、子ど

もの上に笑顔を近づけ、話しかけない限りは微笑は浮ばなかった。二人の実験者は子どものいる室内で自由に話していても、その音声だけでは反応しなかったというのである。

以上のような特殊生活場面で、先天的遺伝的要因を統制した被験者をもってした実験の結果は、(1)乳児の微笑は人間の顔に対する視覚的反応である。(2)この年令段階では、人間の音声のみには反応しない。(3)口辺に与えた触觉的刺激によって生じる微笑は新生児期のおわり頃にみうけられるが、視覚的に人間対象をとらえることができるようになる、成人の顔が最も確定的な刺激条件となる。(以上は二人の双生児に同様な結果をみた。)

デニスの実験結果によって人間の音声のみが微笑を生起せしめるものでないことが強調され、多くの観察者の、先に音声に反応して微笑むという説は疑問視されるわけである。子どもにむかって音声が発せられる際、必然、視覚的に成人の顔はとらえられているからである。その後の観察者も等しく音声を統制して刺激を与えているなお、デニスは微笑は成人によってあたえられる、かずかずの不快からの解放に基く条件反応であるとむすんでいる。かくして、先に述べた三者とも、二か月以後の子どもの微笑反応は成人の「顔」である点で一致している。ビューラー、デニス、共に両者の視線の合致することを条件として付け加えている。かかる刺激因子である成人の

顔を更にゲシタルト学説の立場から実験にうつしたのが、アイノ・カイラである。(一九二八年)彼は成人の正面の顔を形成するゲシタルトと、その形態布置の崩壊する横顔を示して、それぞれに対する反応を観察しようとするのである。このような実験に関する乳児の反応の結果を次のように述べている。(1)三か月から六か月の乳児の微笑は特定の人にむけられるものではない。(2)実験者は必ずしも笑顔でなくてもよい。(3)両眼、ひたい、鼻、口で構成する正面の顔が反応生起の条件である。(4)、(3)のゲシタルトには動きを伴うこと。(註、乳児はその初期の発達段階において、静止するものより、動くものをよりよく知覚する。)

このようにカイラは情緒的要素を除外して実験を展開し、乳児の微笑は成人の親しみを帯びた笑顔に「反映する (Reflect)」というビューラー女史の情緒的要因を重視した説や、二か月以後の乳児は成人の顔を模倣するというウイーン⁽⁹⁾のグエルンゼイ Guernsey, M. 女史の模倣説を反証することに成功している。カイラは六か月以後の子どもをも引きつづき観察して模倣が可能となるのは、はるかに後の発達段階においてであるという。ここに注意すべきことは、成人の情緒的表情を模倣するという説は反証されたにしても、それが同時に、子ども自身の微笑現象の情緒的性質や、社会的性質を反証したのではないということである。

カイラの実験は、その着想において、その実験方法において、き

わめて独創的で明確である。スピッツは、しかし、カイラの用いた被験児をただ一つの施設から得ていること。民族、国籍、文化的背景が同一であること。七一名の乳児を一週間、六名を二か月間観察したにすぎない点を不備とし、更に、カイラがゲシタルト学説に偏向して、発生的、発達的要因に注目することをおこなっている点も批判している。かくして、彼は民族的、文化的、環境的因子を考慮し、且つ発達の意義を重視しつつ、カイラのおこなった実験を骨子として、より広範な徹底した準備のもとに実験を展開している。

スピッツは乳児の微笑反応の普遍性を、白人、ニグロ、インディアン⁴⁰の乳児を対象としてみようとし、次いで、微笑をおこさせる刺激条件の精密な実験を統計的に妥当な数において実施し、微笑反応の本質をきわめようとするともに、子どもの社会関係の発生と発達過程とを生後一年間の微笑現象の変化の中にとどろうとしている。スピッツの場合は、フロイトの精神分析学理論の枠組で説明しようとした点に特徴がある。

以上、乳児期の微笑に関する今日までの実証的研究のあとをたどって見た。これをまとめると、二か月以後の乳児は成人の顔にむかって微笑すること（すべての観察者の一致するところ）、その刺激条件は成人の正面の顔を形成する視覚的ゲシタルトであり、（カイラ、スピッツ）それには生後一年の間に発達の変化の過程がみられること（スピッツ）。なお、この発達過程そのものに乳児と環境（人的環

境）との関係の成立過程をみることができる。（スピッツ）これら微笑反応発達パターンは民族、文化、環境の如何によらず、普遍的な現象である。（スピッツ）

さて、上掲の人々の示した研究成果に基づいて、乳児期の微笑反応そのものに注目し、その発達変化の様相を追求して、社会性の発達の問題を探ろうとおもう。

まず、私はカイラ、スピッツの実験方法を踏襲して、民族、文化、環境の諸点できわめて特有用なわが国の乳児を対象とし、微笑反応パターンの普遍性を検討してみよう。

次に母子関係の正常とみなされる家庭児とその関係成立の困難を予想される施設児とを実験して、両群間に微笑反応のパターンにおいて何らかの相違が見出されるかどうかを吟味してみよう。そして、その原因は何であるかを追求してみようとおもう。

更に、スピッツにならって、微笑反応の刺激分析をおこなってみよう。なお、独自の方法によって刺激条件を更にしたしかめてみたいとおもう。

(二) 微笑反応の発達パターンとその普遍性

(1) 実験の手つづき

(A) 被験児について、(昭和三〇年から現在まで継続しているが、ここには集注的におこなった二、〇〇名を整理して報告する)

表 2 微笑反応の実験に用いた被験児の環境分布

環境	年 令	0:0— 0:0+20	0:0+21— 0:2+0	0:2+1— 0:6+0	0:6+12 1:0+0	計
家庭児	gr. A.	2	6	27	12	47
	gr. B.	0	6	16	40	62
施設児	gr. C.	3	3	60	25	91
計		5	15	103	77	200

環境によって被験児を三群に分類した。まず、A群は中産階級、知的勤労者で夫婦単位の家族構成。B群は同じく中産階級に属すが、夫婦の他、夫の家族も同居している比較的多数家族、中小商店経営者がそのほとんどを占めている。C群は、公私立の施設群で三種の特徴のある施設を選んだ。(表2、3参照)

(2) 実験方法について

表 3 施設児と収容理由

群	収容理由						計
	母親疾病 結核・精	母親死亡	捨 児	生活苦	離 婚		
公立 C ₁	25 7	17	10	5	5		69
都立 C ₂	4	1	3	4			12
私立 C ₃	3		2	2	3		10
計	29 10	18	15	11	8		91

最初に、次のような一定の刺激を子どもに示し、その反応を記録し、シネフィルム並に写真におさめ、客観的考察の資料とする。また、この実験のほか、そのつど、精神発達検査(愛研式)をおこなう。

その方法としては、実験者は乳児の顔との間隔を約五〇糎にたもつ。子どもにむかって正面の顔で対し、肯くような動きを加える(次頁写真、刺激①)。音声と接触の刺激は与えない。この実験者の正面の顔に対して、子どもが微笑を浮かべたなら、ゆっくりと同じ動作をくりかえしながら横顔を示す(写真、刺激②)。反応が認められたなら、再び正面の顔にかえる。この他、片目をおおって同様の動作をくりかえす(実験施行上の注意、子どものねむい時や空腹の時をさける。また、健康障害の時もさける。母親、保育者の同席をことわる。施設児に対しては、男女の実験者をもってあたる。)

(3) 実験の結果

微笑反応の発達パターン

以上の方法でおこなった被験児の反応は年令的に四つの範疇に区分できるような明らかな特徴を示している。もっとも、このように区分できるのは、横断的実験によるため、微笑反応の変化は漸進的過程であることは、いうまでもない。縦断的観察において、これは充分に観察できるのである。この点に留意しながら、次にここにあらわれた四区分の特徴をみることにする。(表4参照)

四か月児の反応

A 児 (施設)

出生日 1. 25. 1958 D.C.A. 4か月10日
検査日 6. 5. 1958 D. Q. 115

刺激 1 正面の顔



刺激 2 横顔



刺激 3 片目



表 4 微笑反応の年齢分布状態 () = %

被験児	年 令	0:0-	0:0+21	0:2+1	0:6+1	計
		0:0+20	0:2+0	0:6+0	1:0+0	
家庭児	Smile	0	4(33)	41(95.4)	12(23)	57
	No Smile	2	8(67)	2 (4.6)	40(77)	52
	計	2	12	43	52	109
施設児	Smile	0	0	59(98.3)	19(76)	78
	No Smile	3	3	1 (1.7)	6(24)	13
	計	3	3	60	25	91
計		5	15	103	77	200

「微笑」である。このような微笑は第二期(生後二日から二か月まで)に至っても例外的にししか現われない。この点はスピッツの場合も同様である。この段階にある二例は私の縦断的観察をおこなった家庭児S児とT児でスピッツにおける一例アドニアと共に、きわめて高い精神発達の水準を示している。(表5参照)この段階で微笑反応を生ずる前提条件は、(1)刺激が知覚できること、(2)反応がおこり

第一期、これは新生児期に相当する。(横断的な本実験は、極く少数に止めた。)この時期に一定の外的刺激に対して無反応であることは先に述べたとおりで、私が終始「微笑のような現象」と記述したように「真の微笑ではない。真の微笑と言われるものはビューラー女史やデニスが名付けたように「人間的刺激に反応する、社会的

得るだけの注意が集注できること。(3)反応を可能にするための神経筋肉協応作用が機能的に整備されていることなどが必要である。
(註、スピッツの特殊例アドニアも高い知的水準の勤労者である父母の第一女で聡明で愛情深い母親に育てられている。)

第三期(二か月一六か月)においては、成人の正面の顔に対して環境差なく、ほとんどの子どもが微笑をもってこたえている。この段階は、刺激は特定の者の顔でなくてもよい。男女の性差をとり

表 5

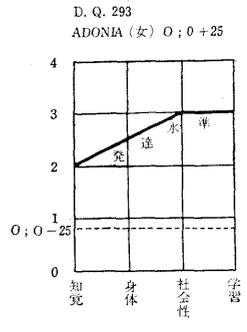
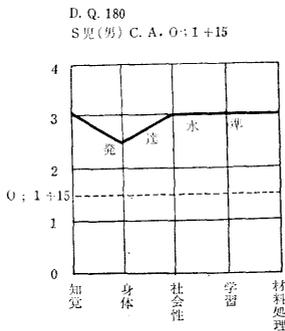
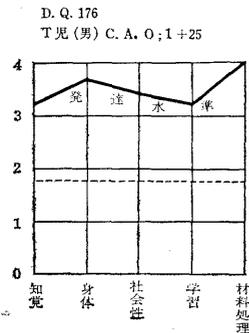


表 6 民族と微笑反応の比較 0:2+1-
()=% 0:6+0

民 族	白 人	ニグロ	インディアン	計	日本人	総 計
Smile	53(98)	26(96)	23(100)	102(98)	100(97)	202
No Smile	1(2)	1(4)	0	2(2)	3(3)	5
計	54	27	23	104	103	207

表 7 環境民族及び微笑反応の比較 0:2+1-
0:6+0

環 境 反 応	施 設 児				家 庭 児			
	白 人	ニグロ	インディアン	日本人	白 人	インディアン	日本人	
Smile	53(98)	26(97)	23(100)	59(98.3)	14(93)	26(100)	41(95.4)	
No Smile	1(2)	1(3)	0	1(1.7)	1(7)	0	2(4.6)	
計	54	27	23	60	15	26	43	

表 8 微笑反応の年令分布, SPITZ との比較

年 令	0:0+20		0:0+21 0:2+0		0:2+1-0:6+0				0:6+1-1:0+0			
	全		全		家		施		全		家施	
環 境	S.	N.	S.	N.	S.	N.	S.	N.	N.	S.	N.	N.
Smile	0	0	1.5	33	96.5	95.4	98.3	98.3	3	49.5	23	76
No S.	100	100	98.5	67	3.5	4.6	1.7	1.7	97	50.5	77	24

S=SPITZ. N=NIWA. (%)

ない。この結果はスピッツの場合と、ほとんど一致している。(表8) 私どもの結果に三名の例外がある。これは前述のS児とT児で既に五か月に入ると刺激をあたえた実験者にいわゆる人みしりの反応をしめし、実験場面で微笑を生じなかった。施設児のほか一名は、同じく五か月児であるが、深刻な栄養失調をきたし、約二か月位の未熟児であった。(実験施行日は入院後一週間後で、精神分裂

る。しかし、彼らは見馴れた顔に対しては、親しみのこもった微笑でこたえることはいうまでもない。このような現象を「打解けなき」(故後藤昌男氏の用語)の時代として従来の観察者も認めているが、実験の結果、その反応のあらわれ方にも、その始期にも、きわめて顕著な個人差、環境差が見出された。特に環境差については、施設児における「人みしり」の始期の遅滞という点でスピッツ

病的母親に育てられていたが、母親が縛死したため入院した特殊例)
この種の無差別的微笑が認められる年令段階は、ヘッツァ Hatzel、ウルフ Wolf、ゲゼル Gesell、A、デニス Dennis、ビローラー Bühler、C、及び我が国の愛育研究所の検査結果とも一致していて、民族、環境差なく、普遍的に、対象の如何にかかわらず、子どもは成人の正面の顔にむかって微笑する。(表6、7) 第四期(六か月—二か月)。六か月前後から、これまで誰に対しても無差別に現われていた微笑は消え、見知らぬ対象に対して、じっと、いぶかしげに、見つめるようになる。首を左右いずれかにむけて、相手の顔から視線をそらせる。近よると泣き出す者もい

のおこなった、白人、ニグロ、インディアンの子どもたちと対照的な差異を示している。(表8) 施設児においては、七六%の子どもが平均、九・五か月、おそい者で一・か月後半まで、無差別的微笑がつづいている。スピッツにおいては、家庭児、施設児を含めて、わずかに三%弱が無差別に微笑するにすぎない。

以上述べたところを要約すると、生後一年間の微笑パターンを対象との関連において、次の三段階にまとめることができよう。

第一段階、対象のない微笑→微笑の原型、生理的安静時の内部知覚による新生児の微笑

第二段階、対象無差別の微笑→民族、文化、環境の差別なく、普遍的に成人の正面の顔に微笑する。(二か月―六か月)

第三段階、対象選択的的微笑→正常な母子関係にある乳児は見馴れた顔と未知の顔とを弁別し、後者に対して、不安の表情を現わす。

(六か月以後)

さて右はスピッツの場合と施設児の反応において、差違するが、正常とみなされる母子関係の下では、人種・文化の別なく、微笑の普遍的パターンとすることができよう。次に私共は第二段階の微笑をおこす条件に焦点をあわせて、その性質を明らかにしてみようとおもう。

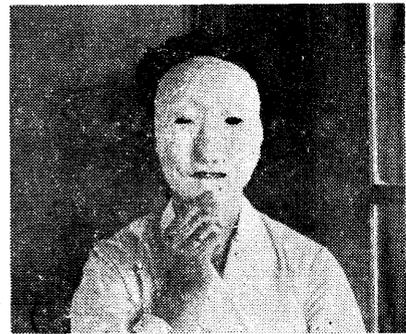
(三) 微笑をおこす刺激は何か

先に述べたように、二か月以後の乳児にとって、彼らにむけられる成人の正面の顔は微笑をおこす刺激条件となるという点で、これまでの観察者は等しく一致していた。これはカイラやスピッツ及び丹羽のおこなった実験で横顔や片目のみを示した場合、常に否定的結果を得たことで確認されたわけであるが、カイラの言うように、人間の正面の顔を構成しているゲシタルトが微笑反応の刺激条件であるとすれば、あえて、人間の顔でなくてもよいはずである。スピッツはこの点を確かめるつもりで実験者自身が大きく口をひらき、両端を上部につりあげて、いわゆる恐ろしい顔の表情をしたものと、ほか二種のマスクをつけて実験にあたっている。スピッツはこれらの実験で、この年令段階の子どもが表情を認知できるかという点も付け加えて吟味しようとしたものである。私は、五種のマスクを用意して、その反応をしらべた。次員掲のマスクを一つ一つかぶって、背きの動作を伴いながら子どもに対すのである。微笑か浮かべば、横顔を示すことにした。このほか、子どもが情緒的関心をもつと思われる無生物、たとえば、哺乳ひん、布製人形(顔の直径一三釐大)及び母親の顔を布でおおって乳房のみを示してみた。以上の実験のほか、正面の顔に対して微笑が頂点に達したとき、実験者に合図して、「横目をつかっ」視線だけを、子どもからはみせせず実験を加えた。マスクに対する結果は表りにあるとおりである。(写真参照) これによると、マスク(一)に対して九六・七%、(二)に対

マスク 一



マスク 二



マスク 三



マスク 四



マスク 五



して、九二%、(三)に対して九八・四%、(四)に対して、九五%、(五)に対して、六四名中、五七名、八九%が否定的反応を示した。(四)における七名の肯定的反応者のうち、家庭児も施設児も、ともに、六か月に達したばかりの者たちであった。これは、六か月頃になると、(四)のおたふく面の表情を、他と弁別し得る能力に達していたものと考えられようか。

無生物に対しては、いずれも否定的で、母親の乳房も、口をちかづける、手で愛撫する、という反応は示した

表 9 各種のマスクに対する反応

月令	刺激環境 反 応	M ₁			M ₂			M ₃			M ₄			M ₅		
		家	施	計	家	施	計	家	施	計	家	施	計	家	施	計
0:2+1	Smile	2	0	2	5	0	5	1	0	1	3	0	3	4	3	7
	No Smile	22	40	62	18	37	55	22	40	62	21	40	61	20	37	57
0:6+0	計	24	40	64	23	37	60	23	40	63	24	40	64	24	40	64
0:6+1	Smile	1	1	2	0	1	1	0	1	1	0	1	1	3	3	6
	No Smile	23	21	44	24	21	45	24	21	45	24	21	45	21	18	39
1:0+0	計	24	22	46	24	22	46	24	22	46	24	22	46	24	21	45

R子(施設) 三か月児 IQ 102

正
面
(男)



正
面
(女)



が、微笑は生じなかった。正面の顔を示しながら、視線だけ相手からそらす実験は、一名の例外なく、微笑はかき消された。



マ
ス
ク
四



マ
ス
ク
五

マ
ス
ク
一



マ
ス
ク
二



マ
ス
ク
三



④微笑反応の発達パターンと対象関係

以上の結果を考察すると、次のような結論に到達する。すなわち、第二段階の年齢に相当する子どもは、人間の正面の顔を構成する視覚的刺激に対して微笑し、その刺激条件は、両眼、鼻、顔、眉、口からなるゲシタルトであつて、両者の視線が結びつくことを必須の条件とする。それゆえ、視線の結び合わないマスクに対しては本年令段階では肯定的反応がおこらない。六か月に到達した子どもが(Ⅱ)のおたふく面に反応を示したのは、既に、わらいの表情の弁別能力が可能な段階に至つたことを示すものと考えられる。このようなゲシタルト知覚は、言うまでもなく、二か月以前の段階では不可能であつた。デニスも言うように、乳児の側の空腹とか、おしめのごれとか、そのほか、数々の要求を充たすために近よつて来て、示されるのは成人の正面の顔である。この顔は生理的緊張と、それが解放される際に結びつき、一方では乳児の成熟と相伴つて、記憶痕跡にきざみ込まれてゆくうちに条件反応の学習過程を通じて、この顔のゲシタルトを示され、視線が結びつきえすれば、生理的要求やその充足にかかわりなく、微笑が生じるようになる。子どもの要求充足のために奉仕するのは主として、母親である。しかし、この年齢段階では「母親」という特定の「顔」の視覚像はでき上つていない。けれども、徐々に、母親の顔は特殊化されてゆく。私どもは母親の腕に抱かれて、その乳をのんでいる乳児が、まばた

きもしないで母親の顔を見あげている情景をよくみかける。三、四か月も過ぎる頃になると、充分に満足した赤ん坊はよく乳首を口から離し、母親の顔を見上げ、喃語するものである。私共の調査の結果では、夫婦単位の家族構成で、外部からの刺激が比較的少ない子どもたちの方が、多枚家族や、施設児より、「人みしり」の現象がはやく現われていた。特に施設児は無差別的微笑が長くつづいていゝ。施設においては特定の対象の顔か記憶にきざまれることはむづかしい事情にある。授乳も一人ひとりを抱いてあたえるわけにはいかない。むしろ、与えられた哺乳びんから、ひとりだけで飲まされていゝ。沐浴と下着の交換の時が唯一の接触の機会であろう。その上、養護者も絶えずかわるわけで、対象との結びつきの機会はきわめて少ない。以上のような諸条件が施設児の選択的微笑を遅滞させる原因であると考えられる。

無差別的微笑の停止の事実(第三段階)は乳児の社会関係の正常性を物語る指標である。この関係は、後の社会関係の基本であり、またその社会関係の型を決定するものである。

微笑反応の発達を継続的に観察すると、かかる反応の底に横たわる情動は、成人における快の感情と同質のものであることが認められる。選択的微笑反応の出現は、子どもが肯定的情動を見分け、経験する能力が備わつたことを示すものである。したがつて、このような微笑反応が発達の途上で、前述の期間に現われないこと、また

は、はなはだしく遅滞することは、そのこと自体が問題を含む徴候のサインではあるまいかと疑われる。それ故、私もは次に、第三段階に更に注目して、対象無差別的微笑と同時に現われる不安現象を実験的に観察してみようとおもう。

五、消極的情動の発達と社会関係

(一)、「人みしり」の現象と不安

まず私は家庭児群と施設児群とに、種々な状況を設定し、刺激を投与して、その反応を観察した。そのあらまは次の表10、11の通りである。

これらの結果は、見馴れた顔と未知の顔との弁別能力が備わったことを示し、また、特に設けられた場面における子どもの諸反応は不安の表出とみなされるであろう。

先に、微笑の発達過程をみてきたのでこれと対照的に消極的情動の発達変化の過程を次に考察し、よって不安情動の意味を吟味しようとおもう。

(二) 消極的情動の発達過程と対象関係の成立

第一段階、新生児期の観察を記述した際に、誕生当時、嬰兒の泣くことは、生理的緊張の未分化な放出現象であり、不快の表出であ

ることを認めた¹⁹⁾。スピッツは生後五、六週におよぶ一時期が不安情動の発達の最初の段階であると言っているがこの時期の不快の表出は本来の意味における不安の表現とははるかに、かけ離れたものである。ブリッジス Bridges²⁰⁾ が生後三週間位から発生する困わく²⁰⁾の情動と見たのがこの段階を代表する生理的緊張状態、不快表出と符合するものであろう。

第二段階に至ると、緊張状態は次第に規則性を帯びるようになる。そして、この状態は常に特殊化された不快な事態に表出するようになる。周囲の者は、この表出によって、子どもの空腹や、からだの痛みなどを区別し、理解するに至る。その結果、人々は子どもから告示される要求に、多少とも一貫した仕方²¹⁾で反応するようになる。子どもは、今や、随意に要求を満足させてもらうため、シグナル(泣くこと)をおくることができる。このようにして方向づけられた動作によって、環境を支配することができる。自らを不快なものから解放し、望むものをもたらすことができるようになった。およそ三か月頃から、子どもの精神生活に記憶痕跡が徐々に増加してゆく。この時期に微笑反応が、学習過程で獲得されたと同様に、以上のべたところの不快からの解放も学習されてゆく。

また、不快な経験をもたらす人間や事物に対して恐怖反応をおこす。恐怖は意識上の記憶に関連しておこるのである。(医師の白衣に対する反応など)

表 10 家庭児における“人みしり”の実験

刺激 反応 場面	1m の間隔で対する	人数	50cm の間隔に縮める	人数	子どもの名前を呼んで、両手を差し出す。次からだにふれる。	人数	
母親に抱かれてい る親の傍に母 乳母車に入れてい る母乳の部屋不在 して退室を急ぐ母親が	1	みつめているが平静。微笑はしない。	20	みつめているが平静。微笑は生じない。母親によりそう。時々母親の方に視線を移す。母親にしっかり抱きつき時々しか客を見ない。	15 3 2	片手を母親の肩胸にかけ、表情が固くなる。泣き出しそうになるが、泣かない。泣く。	10 11 9
	2	じつと客をみつめる。平静。注意は集中している。	20	目立って表情が固くなる。	20	母親の顔をふりかえって見る。客からは背を向けることとなる。	20
	3	注視。否定的。	20	おびえの表情。泣かない。明瞭に否定的感情。	20	泣き出す。はげしく泣く。	20
	4	不安の表情をたたえて注視。	20	泣き出す。	20	より一層はげしく泣く。(涙を出して泣く)	3
	5	母親の去った出口を見て客の顔に視線を移す。じつと客の顔をみつめる。	15 5	泣き顔になる。	20	泣きはじめる。だんだんはげしく泣く。	20
☆ 刺激変化 はげしく泣く最中に、実験者は子どもに背を向ける							
そのまま、しばらく泣いている。		8					
徐々に泣き声が弱まる。		12					
泣き顔のまま、客の背をみつめている。		20					

表 11 施設児における“人みしり”の実験

刺激 場面	1m 以上の間隔で近づく	人数	クリップに近く接近する(手の届く位)	人数	もつと近づく	人数	実験者は手を出して子どもを抱き上げる。	人数
クリップの中にいる。	1	まじまじと見つめる。笑顔はあらわれない。	20	泣き顔になる。	11	泣き出す。口の両端を下げて下を見る。	泣くことを止めてじつと客に抱かれている。胸に手をあてたり、客を眺めたりする微笑は生じない。	11 9
	2	じつとみている。	20	だんだん下を向いて、終にうつ伏せる。横を向く。緊張して来る。	11 9	泣き出す。	他所に視線を移す。口の両端が少し下がる。表情は明らかに泣き顔。声を出して泣かない。	11 20 9
保育者がいる保育床の上クリップの外にも他の子ど	3	無関心。	20	保育者にすがって実験者を眺めている。笑い顔なし。	20	片手を出しかけてひっこめる。素直に抱かれる。不快な表情(泣かない)抱かれたままで実験者の顔を見ている。	3 20 11 9	

第三段階に至ると、不安が六か月から八か月頃に出現する。私の観察では、家庭児に対して施設児はおどろくべき遅滞を示したが、正面から近づいてくる人間に、忌避や後退の態度を示す。これは恐怖に類似するが、恐怖反応ではない。子どもは以前に何らの不快の経験をこの未知の人に対してもったことはないからである。これは何によっておこるのであるか。先に述べた微笑反応の刺激分析と人みしりとの実験結果から、乳児における顔の識別は認識の最初のもので、それは母親との間の情動関係によって発達し、「顔」の識別がその後の発達の進路を切り開き、拒否的情動も、この識別に関与することを見出した。

第三段階で現われた不安に関しては、次のように解釈できるであろう。子どもは母親の顔の記憶と、それによって導かれ、備わった弁別力で未知の人に対決するわけであるが、それが母親の顔でないことを発見するとき、母親に置き去られた時と同様の不安を経験する。しかも、人みしりの最中に未知の人がくると子どもに背をむけると、子どもは泣き止み、しばらくしてその背に近づいて、時にはその上衣にふれることもある。(表10) このような反応は、母親と未知の人の顔に対する記憶が薄らぎ、不安感も薄らいだためとみなされよう。いわばこの第三段階は、微笑が見馴れた対象に選択的にあらわれたように、不安が未知の顔の弁別から生じる。これらの事情を通じて、私共は乳児とその特定の対象との関係は、乳児期の

後半において成立することを認めるのである。

したがって、この時期における施設児の対象弁別のおくれは、施設における特定の対象との関係成立の失敗、または困難性に起因する。人を認めて微笑を始めた三か月頃から、施設児は人の存在に殊更敏感である。家庭児にくらべて、施設児は目立って人なつこいというのは、観察者の等しく一致するところであるが(ゲゼル、デニス、スピッツその他)これは彼らが人との接触の機会に恵まれなからに他ならない。彼らは特定の保母との間に関係をもつことはきわめて困難な事情の下にある。子どもは欲するだけの愛撫を受けず、語りかけてもらう機会も少ない。愛情に枯渇した状態がそのまま改善されずに継続する場合、子どもは単に社会性の面で欠けるだけでなく、おそるべき精神発達の遅滞や、きわめて深刻な異常性の発生を示し、小児精神病様の症状を呈する(ホールビー、スピッツ、丹羽⁽²⁹⁾日本心理学会第二六回、精神分析学会三十七年度報告)。

以上、子どもは消極的情動の発達、特に不安現象に注目して、それが乳児の対象関係成立上どのような意味をもつか、また、不安の現われる第三段階に施設児の人みしりの現象のおくれるのは何に起因するかを考察した。

六、対象関係成立のパターン

誕生以後一か年にわたる乳児期の社会関係の発生と発達とをたずねて、私どもは乳児とその時期にすべての環境因子を代表する母親を対象とする、両者間の関係成立の歴史に注目し、それを情動生起の現われを通じてみてきたわけである。それは未分化性と無援性で特徴づけられる新生児期、無差別ながら人間対象を認知しはじめたことを示す。「三か月の微笑」の時期、および、対象選択的微笑ならびに不安情動の現われをもって特定の対象との関係成立を告げる「八か月の不安」の時期が重要な臨界点として記録され、以上が乳児期における正常な社会的発達のシクエンスであることを見出したのである。

最後に、対象関係成立後の乳児の精神発達、特に社会性の発達の様相を、乳児期の終りまでたどってみる必要がある。私はこれを継続的観察をおこなったS児の場合を顧みながら考察してみよう。生後六か月までに乳児の社会的発達は目立って緩慢であった。その一つの理由は、乳児の無力にある。彼は周囲からの援助をまたなければならぬ受動的な存在であった。しかし六か月を過ぎると、このような状態に甘んじなくなる。それまでに子どもの知覚、運動能力、記憶などはかなり発達して、弁別能力も備わってきている。対象関係の成立を境として情動・社会関係・及び精神発達の全領域にわたって、発達のテンホは急速となる。情動の現れは、更に細かなニュアンスを帯びてくる。一〇か月から一二か月に至る頃には、

不快・不安・失望・嫉妬など、他面、ホメオスタシスの状態から快の感情、ある特定の者への愛情・同情・社会的あそび・玩具を楽しむこと、所有の感情など、多岐にわたる情動が分化してくる。これは前段階の関係よりも、はるかに複雑になった人間関係の発達の内に見出されるのである。私どもはここで、同一視の発達に眼を転じなければならぬ。同一視の痕跡は、三、四か月頃、断片的模倣の形式にみうけられた。これはちょうど、微笑反応のおこり始めた時期で、ピアジェは乳児の微笑も模倣の範疇に入れて説明しているが、これは擬似模倣ともいふべきもので、真の模倣は、八か月から一〇か月に、子どもがその対象、母との関係が確立した後にはあらわれる。S児における模倣、あるいは同一化はおおむね、母親がその子どもに供給する情動的性質の影響によるもので、彼女の意識的、無意識的な情動的心情は、そのまま子どもの動作・表情・音声（抑揚）となって模倣の対象となっている。スヒッツも言うように、模倣の機能は知覚されたものの一つの反映ではなくて、それによって、自我変化を生起させるところの無意識的な情動的関係が加工されたものである。母親の表情の模倣のほか、動作の模倣は、子どもを母親から独立的にすることであるというスヒッツの考えは適切である。かつては肉体的にも一体であり、出生して分身したとは言え、無援の存在であった子どもは、母親に全的に依存している。同時に、母親にとって、子どもは明らかに彼女自身の一部である。子ども

もの側に、徐々に知覚器官が整備し、運動能力が発達し、移動と上肢の機能が可能になるにしたがって、子どもは自由を獲得するようになる。しかも、自由の確保の率に比例して、子どもは対象関係の形成にむかう。この対象関係の確立は、子どもが一個の、独立体として、対象たる存在に關係をもつということにほかならない。子どもは母親の動作を模倣することによって、その自律性を増し加えていく。しかもこのような同一化作用は、意図的に母親が、一つの動作を教示しようとしてとった行動というよりも、母性的な、やさしい情動的風土が模倣という機能を通じて、子どもに作用するものとみるべきであろう。S児における、ゆたかな表情、自然に体

得された動作、顕著な知的発達などは満足な母子の情動關係の土台の上に着々とつまれた学習の結果にほかならない。S児においてはその生活のはじめから、不当に不快をあらわす泣き声をきかなかつた。彼の日々の生活は、新生児の当初から、ある快よい律動の波に乗ったもののような規則性がみうけられた。かくして、この一年の間に全的な成熟と発達とのあとが刻明にきざまれ、今や満一年を経て独立した人格が（それはいまだ、はじまったばかりの独立性ではあるが）母親のゆたかな愛情と知性とに守られ、知らず知らずのうち相互に影響しあいながら、新しく装備された運動能力と言語という武器をもって、第二年をより積極的に人間仲間との交わりを開始することであろう。

乳児期における社会性の希ましい発達をたすけるものは、終始、子どもの直接的環境である母親の存在であり、その安定した情動生活と円満な肯定的人間観に貫ぬかれた知性であると言えよう。乳児において、社会關係は情動をもって実現する。満一年間の社会性の発達の基盤がこの母子關係から出発すると結論してさしつかえないであろう。

母子關係の破綻、不成立による乳児期の愛情欠乏の場合は稿をあらためて記述するつもりであるがここに、施設における保育者並びに管理者の方々に留意していただきたい一、二の点を付記しておく。まず保育にあたる人々はでき得る限り子どもとの接触を保つよう積極的に努力してほしい。六か月以後は殊に折あるごとにやさしく語りかけること。管理者の方々には、乳児期の子どもの保育担当者には殊に情緒の安定度の高い人を配置し、人員配置の変更をできるだけ避けてほしい。また保育者の精神衛生管理に積極的に努力してもらいたい。以上は施設の物理的・衛生的管理と共に、否、それにも優って、乳児の成長と精神発達並に人格形成に不可欠な条件であるからである。

（東洋英和女学院短期大学）

- 1) @Preyer, W. (1888) *The mind of the Child*. pt I. The Senses and the Will. (Trans. by H. W. Brown) New York, Appleton
- ⑤Shinn M. W. (1893—1899) Notes on the Development of a Child. Nativ. Calif. Publ.
- ⑥Darwin, C., "A Biographical Sketch of an Infant," in Munb (1877)
- ⑦石川貞吉「生後一年間における児童発達の観察」児童書院 1914
- 2) @Terman, L. M. & M. A. Merrill, (1937) *Measuring Intelligence*. Boston: Houghton Mifflin.
- ⑧Bühler, Ch., (1927) *The Social Behavior of Children in A Handbook of Child Psychology*. ed. by C. Murchison. Worcester, Mass.
- ⑨Gesell, A., & Amatruda, C. S. (1941) *Developmental Diagnosis* New York, Hoeber.
- @牛嶋, 木田, 森脇, 久浪: 乳幼児精神発達検査, 児童研究叢書Ⅱ, 昭24. 6. 1. 金子書房
- 3) Washburn, K. M. (1929) *A Study of the Smiling and laughing of in fans in the First Year of Life*. Genet. Psychol. Monog.,
- 4) Bühler, Ch. 前出 2) ①
- 5) 前出 2) ①
- 6) Demms, W., (1935) "An experimental test of two theories of social smiling in Infants" *J. Soc. Psychol.*
- 7) Kalla, Erno, (1932) *Die Reaktionen des Säuglings auf das menschliche Gesicht*. Ann. Uni. Abocensis.
- 8) 前出, 2) ①
- 9) Guernsey, M. (1928) "Eine genetische Studie über Nachahmung." *Zeit. f. Psychol.*,
- 10) Spitz, R. A., (1946) "The Smiling Response." *Genet. Psychol. Monog.*
- 11) Spitz, R. A. 前出 10.
- 12) Hetzer & Wolf, K. Baby Tests (1929) *Zeit. f. Psychol.*,
- 13) Gesell, A., (1928) "The Mental Growth of the Preschool Child" in Infancy and Human Growth.
- 14) Dennis, W. 前出 6.
- 15) Bühler, Ch. 前出 2. ①
- 16) 愛育研究所編, 乳幼児精神発達検査, 前出
- 17) 後藤岩男, (昭24)「社会的行動の発達」, 児童と社会生活 児童心理叢書 金子書房
- 18) 丹羽淑子①「乳児の微笑反応に関する研究」日本心理学会第22回発表
①「乳児における不安情動の研究」日本心理学会25回
②「乳児期における対象関係の発生と発達の研究」精神分析研究 Vol. VIII No. 2. 1961
- 19) Spitz, R. A., (1957) *Die Entstehung der Ersten Objektbeziehungen*, Klett, Stuttgart.
- 20) Bridges, K. M. B., (1932) "Emotional development in early Infancy," in Child Development.
- 21) Bowlby, J. (1935) *Maternal Care and Mental Health*, WHO Monograph Series No. 2. (日本語訳, 乳幼児の精神衛生, 黒田実郎)
- 22) @Spitz, R. A., (1950) "Anxiety in Infancy," *Int. J. of Psychoanalysis*
- ① _____, "Anaclitic Depression," (1946) Psychoan. Study of the Child, Jf, New York, Int. Univ. Press.
- ② _____, (1951) "A Note on the Extrapolation of Ethological Findings," *J. Psychoan.* XXXII.
- ③ _____, (1945) "Hospitalism." *The Psychoan. Study of the Child*, Vol.1. 丹羽淑子 (1962) "施設乳幼児の情慮の偏向に関する特発例について" 第26回 日本心理学会発表
- 24) Piaget, J., 1956 *La Construction du Reel*, Paris Newchatel.
- 25) Spitz, R. A., (1957) *No and Yes. On the genesis of human Communication*. Int. Univ. Press.